



# Via Latina 22

2026年4月 353号

## 総本部よりのお知らせ－マリア会

### 内 容

マドレーヌ聖堂への訪問 .....	1
シャミナード国際神学校への教会法上の年次視察訪問 .....	2
東アフリカ地区の地区長の再任 .....	3
イタリア地区の地区長の再任 .....	4
マリア会のリーダーシップを裏側から見る .....	5
ホセ・マリア・サラベリ師と尊者ファウスティノへの敬意 .....	6
福者ギョーム・ジョゼフ・シャミナード：良心に忠実な人 .....	7

### マドレーヌ聖堂への訪問

“マドレーヌ聖堂は、総長評議員会の責任下にある国際的なマリアニストセンターであり、フランス地区の支援と、マリア会の各行政単位から人事と財政の面での貢献を受ける。”（いのちの約束、#74a）

マドレーヌ聖堂のこの新しい機構に同伴するために、総長評議員会は、財務局長、ジェローム・バラキエマ士と霊生局長、パブロ・ランボー師が2026年3月18日から22日にかけて当地に赴き今年の教会法上の視察訪問を行うよう委託しました。この視察訪問に続いて2026年3月23日にマドレーヌ聖堂委員会が開催されました。念の為に繰り返しますが、マドレーヌ共同体とヨーロッパマリアニスト家族、そしてフランス地区の院長の代表者、ヨーロッパマリアニスト評議会議長、そして総長評議員会によって構成されるマドレーヌ聖堂委員会は、マドレーヌ聖堂の存続と福音宣教活動を監督指導しており、そしてそれに法的組織

を提供しています。委員会の議長として、総長アンドレ・ジョゼフ・フェティス師が3月20日、彼の2名の局長と合流しました。



左より：Jacques Stoltz 師, Jean-Edouard Gatuingt 師, Emilio Cárdenas 師, José Kasa-Beya 士, Robert de Lussy 師 (前); André Verhnes 士(後ろ); Jérôme Balakiyema 士, Pablo Rambaud 師, Yves Le Goff 士, Hervé Guillo du Bodan 士, André-Joseph Fétis 師 と François Nanan 師

マドレーヌ共同体は9名の修道者で構成されており、そのうち2名は引退者住居で生活しています。7名のメンバーがフランス地区に属しており、2名が他の行政単位から来ています：スペインとコートジボアール。

マドレーヌ聖堂は、特に祈り、霊性そして赦しの秘跡の場として、ボルドー大司教区の空間的な位置の基準点になっています。福者シャミナードの現存がそこで輝いています。

マリアニスト家族にとって非常に大切なこの場所のもつ影響の故に、祈りを継続しましょう。自分自身のマリアニスト・カリスマの養成のためそこに留まり、あるいは、ここでの福音宣教に協力したいと望む人は誰でも、躊躇しないで関係責任者に申し出てください。

---

## シャミナード国際神学校への教会法上の年次視察訪問

USA 管区の管区長、オスカー・バスケス師と霊生局長、パブロ・ランボー師は、3月13日から18日にかけてローマのシャミナード国際神学校に対し教会法上の年次視察訪問を行いました。いつものように、この2名の訪問者は神学校のプログラム、そして祈りと食事の時間に溶け込んで、神学校共同体の生活を分かち合いました。

この訪問は、養成者である校長のミゲル・アンヘル・コルテス師、そして副校長のエルヴェ・ダグボ士との会議で始まり、次の校長、マイケル・オティエノ・オチエン師もこの会議に出席しました。この会議で、養成者たちは自分たちが準備した報告書の説明を行いました。この日程の中で、2名の訪問者は神学生と養成者と個人的に話し合いを行いました。

この共同体は17名の修道者によって構成されています：14名の神学生、2名の養成者、

そして2月に共同体に加わったマイケル神父です。異文化共同体での生活、地元の言語を学ぶ挑戦に加え、常に多様文化への課題を抱えており、これは受け入れて学び続けなければならない一つの賜物です。



訪問者は彼らの温かい歓迎について神学校共同体に感謝しました。訪問者は特に、自分たちが受けている養成に関する神学生らの評価を強調しました（司牧的、マリアニスト的、学問的養成プログラム）。この訪問の最後に、委員会はその報告書を先ずは共同で総長評議員会と養成者に、それから、神学校共同体に説明しました。委員会はこの共同体と気がついた点と将来の提案と一緒に話し合いました。訪問チームは、ミゲル・アンヘル師が校長として務めた6年間の彼の奉仕に対して特に感謝し、そしてまたマイケル師に対し、彼がこの任務を喜んで引き受けてくれたことに感謝しました。

## 東アフリカ地区の地区長の再任

東アフリカ地区メンバーの意見聴取の後、総長は評議員会の同意を得て、スティーブン・ワンヨイケ・ムブル師を第2期目、3年間の任期で地区長として再任しました。任期は2026年5月22日に始まります。



スティーブン神父は過去5年間、地区長として奉仕しました。東アフリカ地区は61名の修道者を有し、そのうち53名の修道士と8名の司祭から構成され、そして9名の修練者を有しています。この地区はケニア、マラウイ、そしてザンビアに分布した9共同体で構成されています。その宣教活動は主に教育に力点が置かれており、またいくつかの技術専門学校、3つの中学・高等学校、1つの小学校、そして1つの小教区を含んでいます。地区メンバーは、スティーブン神父を、マリアニスト・カリスマと家庭の精神を支える強いマリアニスト・アイデンティティを持った霊的指導者として説明しています。彼のリーダーシップの経験、発展と持続可能性への彼

の配慮、そして修道者たちへの彼の配慮は、地区の福音宣教とその進行中の事業にとって確実性と継続性をもたらしています。私たちは彼の継続した奉仕に感謝します。東アフリカ地区を、今の時期とこれからの新しい任務の期間を通して皆さんの祈りの中に留めてください。

## スティーブン・ワンヨイケ・ムブル神父

スティーブン神父はケニア、エルダマ・ラヴィン出身です。彼は 1998 年に初誓願を宣立し、ローマのグレゴリアン大学で神学を学んだ後、2009 年に司祭に叙階されました。彼は東アフリカで教育と司牧の分野で任務に従事し、現在、東アフリカ地区長としてその奉仕に務めています。

---

## イタリア地区の地区長の再任

総長は、彼の評議員会の同意を得て、イタリア地区メンバーの意見聴取の結果、ダビデ・ゴジオ士を 2026 年 6 月 30 日から始まる第 3 期目、3 年間の任期で地区長として再任を承認しました。この第 3 期目は、『世活の規則』(113, 7-46 f) に従っており、イタリア地区指導書の例外として認められています。

過去 6 年間に渡り、ダビデ士はその福音宣教活動と日常生活においてイタリア地区を導いてきました。現在、イタリア地区は、5 つの共同体に生活している、12 名の修道士と 15 名の司祭を含む 27 名の修道者から構成されています。地区の福音宣教はローマの 1 つの学校、サンタマリア学院を通して、またローマのコンドフリ、そしてスカルダフェロの小教区にて実践されています。



意見聴取の中で、イタリア地区のメンバーはダビデ・ゴジオ士の若者への司牧的配慮と指導者としての経験を強調しました。彼らはまた、彼がヨーロッパマリアニスト会議に精通していること、そして他の地区長評議会との進行中の協力を強調しました。これらの資質は、ヨーロッパの行政単位としての継続性を支え、これら行政単位の識別と構造改革の働きを継続するのに役立ちます。私たちはダビデ士がこの役割を継続し、喜んで引き受けてくれたことに感謝を表明します。

この時期に、またこの新たな任期を通して、皆さんの祈りの中にイタリア地区を留めてください。

## ダビデ・ゴジオ士

ダビデ士はロンバルデイのグサーゴの出身です。彼は 1976 年初誓願を宣立し、3 年間の

神学の勉強を終了し、文学士の資格を得ています。彼の福音宣教は教育における奉仕活動と国際的宣教活動、とりわけアルバニアのレジェでの 2001 年から 2010 年にかけての活動が含まれます。現在、彼はローマのサンタマリア学院の校長であり、“サンタマリア共同体”に住んでいます。

## マリア会のリーダーシップを裏側から見る

サンアントニオ（テキサス）のセントメアリーズ大学の“オーナーズプログラム”（成績優秀な学生対象の特別教育プログラム）から 10 名の学生と彼らの学部教授から成るグループが、養成と共同体に根ざしたリーダーシップについての体験のため、2026 年 3 月 7 日から 14 日にかけてローマのマリア会総本部を訪れました。今年の最初の訪問を継続する意味で、帰国する前に学生たちは自分たちのリーダーシップの歩みと中核となる価値観について再び考察しました。また彼らは、『生活の規則』を通してマリアニストの統治を調べましたが、それは 1981 年総会についての NACMS ビデオと、米国マリアニスト公文書館への訪問を通してでした。



ローマで、彼らは総本部資料室を訪れ、総長評議員会のメンバーと面談しましたが、それは総長評議員会の責任、協調的リーダーシップの実践、また複雑でグローバルな課題のかじ取りにおける祈りと識別の役割などについて学ぶためでした。柱の聖母聖堂での黙想はマリアニストのリーダーシップを導く霊的基盤を更に目立たせる助けとなりました。

社会学と犯罪学の両専攻の最上級生のエリカ・ピネダ・オルタは次のように言いました。

“私はマリアニストの価値観を、奉仕の生活と共同体の生活の原理と基盤として理解しながらローマに来ました。しかし今日、私は何か異なる理解を持ってローマを去ります；私は今、マリアニストの価値観を一つの生き方として理解します。共同体はマリア会の福音宣教の実りです。共同体は人々が自分たちの召命に耳を傾けるときに起こること、ある問題が起

きて、人々が解決を見出すために協調すると決めるときに生じることです。リーダーシップにおける平等は単なる 1 つの考え方ではありません；12 名の修道者、信仰で結ばれた兄弟たちが見知らぬ若者たちと食事を分かち合うために一緒に席に着き、彼らの経験と信仰を私たちと分かち合う時、彼らは私たちが持っている可能性を考慮にいれ、どのようにして私たちもまた助け合うが出来るか説明します。この経験、またこれからの年月にそれを継続する可能性は、正にシャミナード神父が希望した願いと通じ合います：つまり、彼が創立した共同体はその宣教活動を分かち合うことに開かれているということ通じ合います。宣教活動は一人で出来る範囲を超えず、続行出来るためには、シャミナード神父は、若者たちの信仰の旅において彼らに同伴し、彼らの疑問に応え、そして彼らがその人生のあらゆる局面で成長するのを助けて、そのことがマリアニスト学校のような場で他者に伝えられなければならないと信じていました。”



この訪問は、お互い貴重な見方についての意見交換の場を与え、また生まれてくるリーダーとの関係を強めることへの一つの例を提供しました — これは、責任の分かち合い、およびマリアニスト世界を通して若者たちとの深い協力に向けて第 36 回総会が呼びかけることを反映している一つのアプローチです。

## ホセ・マリア・サラベリ師と尊者ファウステイーノへの敬意

サラベリ神父は、1957–1963 間、スペイン、バレンシアの柱の聖母学校の校長でした、そしてマリア会総長としての任務を終えた後、彼はバレンシアのマリアニスト共同体に戻りそこで最後の 20 年を過ごしました。2026 年 3 月 25 日、ビトリアで彼の生誕 100 年を記念しました。同日のこの機会に、彼らが私たちに与えてくれた多くのことに対して、サラベリ師と彼の生徒ファウステイーノに賛辞が捧げられました。

賛辞の式典には、ファウステイーノに関する記録映画（初日）が上映されました — そのタイトルは“私たちの中にいる 1 人の聖人、ファウステイーノ・ペレス・マンガラノ”です。

この記録映画の中で私たちは彼の親戚と、まだ生存している学校の友人たちの証言を聞く事が出来ます；彼が如何に修道召命と司祭召命に影響を与えたかが分かります；ファウスティーノを自分たちのインスピレーションおよびパトロンとしての認めているマリアニスト世界の周りに起こる多くの運動やイニシアティブに近づくことができます。さらに、以前に公表されていなかったファウスティーノの自身の写真を見ることができます。

記録映画の上映初日の後、このテーマについての討論会がローカル新聞、Las Provincias の局長補佐、パブロ・サラザール氏の見事な司会で行われました。多くの高位者がこの式典に出席しましたが、その中に、バレンシア大司教区の 2 名の補佐司教、アルトゥーロ・J・ガルシア・ペレスとフェルナンド・E・ラモン・カサス、そしてサン・フェリウ・デ・ロブレガットの名誉司教、アグスティン・コルテスがありました。親戚のメンバーの中にファウスティーノの姉妹、マリア・ユージニーが出席していました。式典はスペインワインでの乾杯で終わりました。YouTube 上でのこの記録映画へのアクセス：

<https://www.youtube.com/watch?v=7Mcz-seKE-o>

英語とフランス語での字幕つき映画が近いうちにビデオに加えられます。

## ニュースレター

「Faustino と共に」、[2026 年 4 月](#)。これを読むにはリンクをクリックしてください。私たちはこれを読み分かち合うようあなた方にお勧めします。



## 福者ギョーム・ジョゼフ・シャミナード：良心に忠実な人

“マリア会の事業の創立者として、私には神が私に望んでいる通りにそれを為す義務があります。もし私が全力を挙げて反対しないなら、この事業は損なわれるでしょう。私は私の息の続く限りそれを行います。神が私に示されたように、教皇庁に依って承認されたその事業を私が行ってきたように、この事業があるべきものとして私が納得するまで、私の良心は休むことはありません。神と、この世の神の代理人だけがこの任務から私を解放出来ます。”

この言葉は、シャミナード神父がシュボー神父に口述し、1845 年 3 月 31 日のアルビの司教代理への手紙でどのように自分自身の考え方を表明したかを示しています。事柄の背景は、私たちが知っているように、すべて彼の生涯の最後の 10 年間の論争です。正にこの段階においてこそ、自分の良心に対する必要な避けがたい忠実というこのテーマが最も明確に力強くその人の手紙に表れるのです。

とはいえ、良心というテーマは、既に早い時期に先ずはボルドーのソダリスト、それからマリアニスト修道者に対するシャミナード神父の教えの中で見られます。私たちはこのことについて幾つかの例を知っています。一つは、将来の神父ララン、当時14才の若者によって纏められた1809年の一つの黙想会であり、この黙想会で、シャミナード神父は良心の正しい形成と、その間違った形成について指導しました。他の興味あるもう一つ例は、ある講演において彼が断言しているものです：“私たちはどうしても自分自身で良心を形成する必要があります、というのは“信仰に基づいていないことはすべて、罪である”：Omne quod non este ex fide, peccatum est. (ローマ14・23)からです。”そして彼はパウロの書簡に次の解釈を付け加えています：“信仰というこの言葉で、聖パウロは良心を意味しており、単純に信仰を意味しているではありません；あるいは、もしあなたが望むなら、パウロは実践的な信仰を良心という言葉に言い換えているのです。つまり、もし罪を犯さないなら、良心がなければなりません、そして誰であれ良心なしに行動すれば、或いはその良心に反して行動すれば、その人がすることは何であれ、例えそれが善い業であっても、そうしながら罪を犯すのです”（『信仰に関する記録』、527）。シャミナード神父はまた、罪へと導く墮落した良心があるので、良心は正しく形成されなければならない、と説明しています。



列福式の際に、福者シャミナード神父の像が描かれたタペストリーが公開される瞬間

初めに引用した文章において、ほとんどしっかり纏まった総括のように、良心に忠実であることは創立者にとって唯我主義、つまり自分自身に閉じ籠った生き方ではないと私たちは分かっています。彼にとって、良心は神に耳を傾ける場所であり、そしてこの耳を傾けることから、良心において決して拒否されることができない使命を受けているという深い確信が出てきます。良心は単にその人自身への忠実、その人自身の考えや計画への忠実としてのみ形成されるのではなく、神の声と神の意志への忠実として形成されます。更に言えば、良心はこのケースではキリストの代理者によって代表される教会的仲介への従順と関連しています。このような方法にしっかりと根を下ろしたこの意識から、“命の最後の一息まで”働き、忠実である強い力が生まれます。

自分の良心への忠実さは、自分の体験した政治的革命と大きな社会的、文化的な変化の波

乱万丈の時期において、シャミナード神父が一貫性と大胆さをもって行動する助けとなりました。彼は適切な基準をもって振る舞い、正しい方向性を失うことは決してなかったのです。それは彼にとって明快でした、例えば、聖職者市民憲章に宣誓しないことが彼と彼の司祭職にとってどんな結果を引き起こすかを承知の上で、その宣誓をすべきではないということは彼には明らかでした。1830年代の重大な危機において、神が彼に示された宣教計画の実践を彼は決して放棄しませんでした。事実、その人生の最後10年間、嵐のさ中、揺るがない岩にしがみつくとように、彼は自分の良心にしがみついています。

この最後の段階で、自分は良心に基づいて行動しているという確信、そして、それゆえに、自分は正しいという彼の主張は、その手紙の中に頻繁に見られます。1845年11月27日のメイヤー神父宛への手紙で、彼はこの件に関して力強い声明を述べました：“私は真実と私の良心以外にいかなるものにも従うつもりはありません、、、私の良心は悲鳴をあげ続けています：マリア会は裏切られつつある、、、マリア会の創立者および総長としての私の良心は、マリア会を歪め、また将来の成長を阻害するであろう不名誉をもってその初期の年月を覆い隠すかもしれない偽善的ゲームの結果に対して目を閉ざすのを許しません。”

良心への忠実さは、彼が明確に同意せず、必要だと判断したときに彼がその乱用を非難した教会当局者の前であっても、シャミナード神父が十分な自由をもって行動させました。当時のボルドー大司教とのシャミナード神父の対決は良く知られています。1847年7月20日の教皇大使あての手紙に次のように書いています：“大使閣下、私は私の心中を洗いざらい披歴したいと思います。なぜなら、恥ずべき事柄をすべてやめさせる時が来たように思われるからです、、、一方では、ボルドー大司教様は、政府承認の霊的領域における司教権限を乱用し、また乱用し続けておられます。他方では、私の良心はこの権限の乱用から生じる無秩序と、この権威の乱用によって維持される他の若干の重大な悪弊を黙認することを私に許しません。”

今日、福者ギョーム・ジョゼフ・シャミナードの霊的子供として彼に近づいている私たちは、主と主の教会に注意深く耳を傾けながら自分たちの良心を形成する人となり、また神の意志の実現において真実だけを追い求める人々の魂の自由を持って行動するよう求められています。これが聖性への道です。



“イエスの復活を信じることは新しい人生の境目に留まることです。それは不可能が現実となる境目に留まることです。”

2026年の復活祭の日曜日之际し、ピア・ラティーナ 22 は、復活の主が世界中の全ての人々に平和をもたらしてくださるよう祈りつつ読者の皆様に温かいご挨拶を申し上げます。

## 最近の総本部通信

- 訃報：1-3号
- 3月3日：“いのちの約束”の道を歩む-第4号書簡、総長評議員会から3ヶ国語で全会員に送付
- 3月19日：ファウスティーノ、3ヶ国語で全マリア会員へ、列聖請願総代理、アントニオ・ガスコニ師から送付
- 3月25日：非公式教育活動に関する情報の送付依頼、教育局長、デニス・バウティスタ士から3ヶ国語で全教育部補佐あて送付
- 3月30日：シャミナード国際神学校の視察訪問報告、霊生局長、パブロ・ランボー師から3ヶ国語で全行政単位長およびゾーン会議議長あて送付

## 総本部日程

- 4月8-10日：アンドレ・ジョゼフ・フェティス師とパブロ・ランボー師がマドリッドでのヨーロッパマリアニスト会議（CEM）に参加
- 4月11日-5月7日：総長評議員会が韓国地区を訪問